

倫理

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

本年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の公民科延受験者数（追・再試験含む。）は、204,223人（昨年度201,528人）であった。そのうち「倫理」受験者数は26,046人（昨年度30,757人）、科目選択率は12.8%（昨年度15.3%）で、昨年度と比べて約4,700人減少し、科目選択率は2.5%低下した。公民科延受験者数は増加しているが、「倫理」受験者数は減少、また、遡って本試験「倫理」受験者数の推移を辿ると、平成25年度の36,151人から減少し続け、本年度の受験者数と比べると、約1万人減っている。平均点の推移を見ると、平成26年度は60.87点、平成27年度は53.39点（約7.5点低下）、本年度の「倫理」の平均点は51.84点と、昨年度よりさらに約1.5点下がっている。平均点下降については、問題の難化が要因の一つと考えられる。平均点の推移のみから問題の妥当性を判断することはできない。しかし、各大問のリード文や原典資料などの主旨はよく読み取り、正答を導くことができる読解力・判断力をもった受験者が多いのではないか、あるいは「倫理」を選択する受験者は一般的に比較的高い学力を有しているのではないか、という意見もある。「公民」の他科目選択者との公平性を考慮しつつ、地道に学習した者が力を発揮できるよう、更なる出題の工夫や配慮を検討いただきたい。

昨年度と同様、今年度の問題にも単に知識を問うだけではなく、思想や概念の本質的理解、更に総合力・判断力を問う良問が含まれており、受験者へ倫理的課題について問い掛けがなされていた。マークシート形式という制約がありながらも、現行の高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）の目標に即した応用力・思考力を問う意欲的な問題も見られ、問題作成部会の取組には深い敬意を表したい。

以上を踏まえて、本年度の試験問題について次の視点から検討及び評価を実施した。

- (1) 学習指導要領の目標及び内容に適しているか。また、それに準拠した教科書や高等学校における学習内容に即した問題であるか。
- (2) リード文はメッセージ性を持ち、受験者の思索の糸口になるようなものであるか。
- (3) 基礎・基本から総合力、判断力及び応用力を問うものまで、バランス良く出題されているか。
- (4) 問題の難易度、配点及び出題方法が適切で、各分野のバランスが取れた出題であるか。

2 試験問題の内容・範囲等

第1問 「望ましく、公平で連帯感の強い社会」について（現代の諸課題、青年期、西洋思想）

今日の課題である格差社会を意識させるリード文で、家庭環境の違いによる成功、公平や不公平、税の在り方や機会均等など、受験者に考えさせるメッセージ性をもつ。また、各設問は、本文のテーマに沿った内容となっており、全体的にやや難しいがよく練られた出題である。

問1 遺伝子の応用技術をめぐる時事的な内容を取り入れたやや難しい設問。

問2 青年期と日本の近代思想に関する融合問題だが、ウの井上哲次郎については学習が及んでいないのではないか。やや難しい設問。

問3 欲求不満に対する反応についての基本的な問題。平易な設問。

問4 引用資料『税と正義』の読解問題。リード文の理解を深める良問だが、読み取りに時間

がかかるやや難しい設問。

問5 若者の意識調査に関する二つのグラフから読み取れることを問う問題である。思考力・判断力を必要とし、読み取るのに時間はかかるが正答は導ける。標準的な難易度の設問。

問6 アファーマティブ・アクションに関する踏み込んだ内容で、やや難しい設問。

問7 アは世代間倫理については基本的内容だが、ハンス・ヨナスまで踏み込まれると正誤に迷う難しい設問。

問8 標準的な設問だが、ボランティア元年は倫理では見落としがちか。

問9 「コミュニタリアニズム（共同体主義）」は新課程から取り入れられた内容だが、読解力と概念の正確な理解が求められた。受験者にとってはまだなじみの薄い言葉で難しい設問。

問10 本文の内容に関する正誤組合せ問題。8択の選択肢だが、二人の考え方の違いをしっかりと押さえれば三つの文の正誤判定はできる標準的な設問。

第2問 「規範的なものの意義」について（源流思想）

規範は、社会秩序の維持という見方をしがちであるが、社会の在り方だけでなく、個人の在り方にも関わる問題として先哲は捉えてきた。その視点から、規範の意義について受験者に気付かせるリード文となっている。第2問全体として、難易度はやや難しい。

問1・問2・問3 基本事項の理解を問う標準的な難易度の設問である。

問4 仏教における煩悩や苦についての理解を問う難しい設問である。②の「四苦」については用語のみならず本質的理解がないと誤答を招く。正答である④については「五蘊盛苦」の五つの要素のうち、「色」が物質的要素で、「受・想・行・識」が精神的要素であるとまでは、学習しきれないのではないか。

問5 キケロの『法律について』の一部を読み、趣旨を読み取る標準的な設問。ストア派の理法の考え方を踏まえて、その理解を原典でも確認できる良問である。

問6 ユダヤ教の律法に関する標準的な設問だが、倫理というより歴史的設問ではないか。

問7 イエスの教えについての理解を問う平易な設問。

問8 プロティノス、ムハンマド、世親、荘子の思想が理解されているかを問う標準的な設問。

①は「一者」というキーワードからアリストテレスを消去できるかどうかを問うが、プロティノスそのものはやや細かい知識であろう。

問9 リード文の趣旨一致問題で荀子、仏教、ユダヤ教の思想についての各4行にわたる記述をそれぞれ読み取り、正誤判断する必要があるが、標準的な難易度の設問。

第3問 「喜びの省察とよき生」について（日本思想）

先人たちの「喜び」についての省察が、よき生に深く結び付くことを述べたリード文である。将来を見通しにくい現代において喜びの省察を契機とし、自分の生を考えさせようとするメッセージが伝わってくる。その意義は感じられるが、詳細な知識が問われたり、やや補足的な知識や読み取りにくい資料文が使われたりした。従って、全体としてはやや難しい難易度の設問。

問1 「禊い」「清明心」「禊」「崇り」といった基礎的な用語だけでなく、記紀神話についての詳細な知識までが問われており、受験者は困惑したであろう。やや難しい設問。

問2 和辻哲郎が説いた日本神話の神々の性格を問う。「祀る神・祀られる神」、柳田国男の祖先崇拜、折口信夫の「まれびと」などはやや詳細な学習を必要とする。やや難しい設問。

問3 『金光明経』は教科書にあまり記載がなく、『維摩経』は『三経義疏』に関して用語のみの記載が多い。したがって、受験者にとって正答するにはかなり厳しかった。難しい設問。

問4 親鸞が説いた「悪人正機」「称名念仏」「絶対他力」「自然法爾」についての理解があれば、

論理的に考えて正答を導き出すことができる標準的な難易度の良問である。

問5 読解力を問う。この資料文の内容は正確には読み取りにくい。やや難しい設問。

問6 本居宣長が説いた「もののあわれ」「真心」「漢意の排除」といった思想を手がかりとして正答を導くことができる標準的な難易度の良問である。

問7 武者小路実篤、阿部次郎、坂口安吾、小林秀雄について詳細な学習が要求される。また阿部次郎は教科書の説明がかなり少ないので混乱したであろう。難しい設問。

問8 西田幾多郎の「純粹経験」に関する基本的概念理解を問う標準的な難易度の良問である。

問9 リード文の趣旨に合致しない記述を選択する設問。「適当でないもの」は新形式だが、時間をかけて丁寧にリード文を読み取れば正解できる。標準的な難易度の設問。

第4問 時間をめぐる西洋近代思想の展開（西洋近代思想）

近代の西洋における時間観念が近代科学を發展させたのみならず、時間と切り離せない人間の生を捉え直させる役割を果たした。それを指摘することで、時間について改めて考察することの意義を説いたリード文である。ルネサンス以後現代に至るまで幅広く出題され、全体的には標準的な難易度の良問である。

問1 ボッカチオの著作を問う平易な設問だが、アルベルティは受験者になじみがなかろう。

問2 ガリレイに関する理解を問う平易な設問だが、ブルーノを知る受験者は少数であろう。

問3 近代社会の負の側面について、近代から現代まで幅広く思想家を取りあげ上げ、その思想の概念理解を求める設問であるが、キーワードが明確であり、標準的難易度の設問。

問4 カントの倫理思想に関する問題で、読解力と正確な概念理解が必要であるが、正答文が標準的レベルのため、正答を導きやすい標準的難易度の設問。ただし、誤文を誤文とする根拠を正確に見出すのは難しいと思われる。

問5 イギリス経験論における3名の思想家の概念理解を求める設問だが、バークリーとヒュームについて、ここまでの理解ができている受験者は少数であろう。やや難しい設問。

問6 ニーチェの思想に関する基本的用語を問う平易な設問。

問7 ベルクソンの文章を題材とし、その思想を知らなくても正解に至れるが、文章自体は易しくなく、読解力を試す問題であり、やや難易度の高い設問である。

問8 ハイデガーとサルトルの概念理解を問う。ハイデガーの説明文は標準的であるが、サルトルの説明文を判断するにはやや細かい知識が必要であろう。やや難易度の高い設問。

問9 趣旨一致問題で、標準的難易度の設問である。

3 試験問題の分量・程度等について

試験問題は、昨年度と同じく大問4、総設問数37であったが、各大問のリード文、設問における引用資料、グラフの読み取り、空欄補充問題など、かなりまとまった分量の文章を読まなければならなかった。また、正誤判定問題、特に三つの文の組合せ問題で全ての文の正誤判断を求められたり、細部までしっかりと読み解く必要があったり、受験者にとっては厳しかったと思われる。

平均点は、前文で述べたとおり2年連続で下降した。文章量が多く、読解や読み取りに時間がかかり、時間を気にして思うように解答できなかった受験者が多かったのではないかと考えられる。

問題の程度については、第1問、第2問、第3問がそれぞれやや難しく、第4問が標準的な難易度であり、全体としての難易度はやや難しかった。各設問は、基本的な用語など知識を問うものだけでなく、概念の正確な理解、倫理的な思考力・論理的読解力を問う設問が多く、科目の特性を踏まえたバランスの取れた問題であった。ただ、細かな知識を求められたり、解答に時間がかかる

設問が多かったりした。しかし、選択肢の作り方によっては受験者には取り組みやすい難易度となる。そのような配慮をお願いしたい。

4 試験問題の表現・形式等について

各設問の表現については、受験者が理解できる範囲内のものであったと考えられる。

形式等については以下のとおりである。7択以上の選択問題は12問と、昨年度より3問増えた。

その中で、三つの文の正誤を全て判断しないと正解できない出題が6問と、昨年度より1問増えた。さらに、時間がかなり費やされるリード文に関しての正誤問題が2問新しく加わった。そして、選択肢等が7行という設問は解消されたが、3行以上のものが22問と、昨年度より3問増えた。また、ひとつの語句を単純に選択する設問が0問と、昨年度より2問減った。従って、全体的にはさらに長文化した。出題の類型についても、用語や人名等についての知識を問うものは3問と、昨年度より7問減った。概念等についての理解を問うものは23問と、昨年度より5問、総合的な思考力・判断力・応用力を問うものは11問と、昨年度から2問増えた。以上のように出題形式だけを見ても、受験者の負担は、従前よりかなり重くなった昨年度以上に厳しくなったと判断できる。

「倫理」という科目の特徴を踏まえた出題であったことは十二分に理解できる。だが、選択科目としての「倫理」は、現在、第1・第2選択科目の絡みもある。「公民」の他科目に「地理歴史」をも加えて、その選択者層の学力像を丁寧に分析しつつ、バランスを考慮した出題をお願いしたい。

5 要 約（総括的な評価）

各リード文は、よく考え、練られていると思われるが昨年度と比較するとメッセージ性という点では若干後退した印象を受ける。その中で、第1問の会話文は身近な話題から正しい社会の在り方を考えさせ、高く評価できる内容であった。昨年度指摘したグラフの読み取り問題も時間こそかかるであろうが正解を導き出せる出題となった。しかし、資料問題や選択肢が難解化、長文化する傾向が見られ、受験者は全問を解答するのに多くの時間を必要としたであろうことも感じられた。

設問について、まず大前提を確認しておきたい。学習指導要領は、網羅的な思想史の学習に陥らないようにと述べるとともに、課題探究的な学習の実施を求めている。また、24年度センター試験より、地理歴史・公民科については第1・第2解答科目に区分され、結果的に権利として受験し高得点を偶然出しても無意味となった。したがって「倫理」の受験者はきちんと学習して受験する者が大半であろう。学力的に比較的高い層が受験している、という意見もある。

確かに出題は教科書の範囲から出されている。単に知識を問うのではなく、考えさせて正解を導かせる良問も少なくない。問題作成部会に対し深く敬意を表するものであるが、教科書の脚注または本文で僅かに触れている程度の用語や思想家の理解を正確な正誤判定で問われれば、難易度は高くなるであろう。易しくなくとも、授業にまじめに取り組み、基本的理解がきちんとできている者が力を発揮できるような出題を、選択肢の作り方を含めてお願いしたい。このレベルの平均点が継続した場合、「倫理」のみならず「公民」から「地理歴史」へのシフトが進むことを危惧している。